

子どもにとっての『もの』の持つ意味について

Things that effect children's development

西垣吉之* 山田陽子* 馬場佑真** 西垣直子**

Yoshiyuki NISHIGAKI Yoko YAMADA Yushin BABA Naoko NISHIGAKI

子どもは集団生活の中であって、いろいろな『人』やさまざまな『もの』に出会い、かかわりながら生きている。

本研究では、子どもにとっての『もの』の持つ意味を明らかにするために、保育実践記録から事例を抽出し、子どもと『もの』とのかかわりの実際を記述し、考察した。その結果、子どもが『もの』とのかかわりにおいてあらわしてくる姿の中に、子どもの内なる世界で起きていることが投影されること、また、『もの』とのかかわりが子どもの育ちに大きく関与している事が分かった。

キーワード：『もの』、保育実践、

はじめに

子どもは集団生活の中であって、いろいろな『人』やさまざまな『もの』と出会い、かかわりながら生きている。筆者らは、保育の場における『もの』の存在が子どもにとってさまざまな意味があることや、『もの』の存在が子どもの育ちを促す役割を果たしていることを実践の中で実感している。

目的と方法

本研究では、子どもの育ちが『もの』との関わりを通してどのように促されていくのかを捉えるとともに、子どもにとっての『もの』の持つ意味について考察する。

方法は、実践研究である。抽出児T男は保育園に2歳児より入園し、4月現在2歳3ヶ月である。T男はほとんど言葉がでず、発達療育センターで言葉の指導を受けている。ここではT男が『もの』とかかわっている保育場面を細かく記録し、『もの』の存在がT男の育ちにどのような意味があるのかを考察する。

結果と考察

1、慣れ親しんだ『もの』によって心の安定を図った時期

事例1 (4月)

T男は毎朝保育室で行う「朝の体操」の輪に加わろうとせず、離れたところから見ている。担任が誘ってT男と手をつなぎ、もう片方の手を他の子どもとつなげ

ようすると、嫌がって激しく泣きじゃくる。そしてT男は押入れの前に行き「バジュバジュ」と担任に言っ、お昼寝用に自宅からもってきているお気に入りのキャラクターの毛布を取ってくれと要求する。毛布を渡すと、保育室の隅のほうに移動して毛布に潜り込み、全身を覆う。T男は毛布の中でしばらく泣き続けていたが、やがて静かになり、自分で気を取り直した様子で、毛布から出てきて、その上に座って体操している子ども達や担任の姿を見ている。このような姿が2週間ほど続いた後で、T男は保育者の誘いかけに応じて、徐々に体操の輪に入るようになっていった。

毛布は人の肌を感じさせるような柔らかさと暖かさに加え、「包み込む」という性質も持ち合わせている。これらの毛布の性質とT男のお気に入りであることが、彼の存在を守り、安心感を与えているようだった。保育者との信頼関係が確かなものにされていなかったこの時期、T男は毛布という『もの』が持っている力を借りて、自ら心の安定を図ろうとしているように見えた。

毛布の中に潜り込むことは、物理的に外部と自分を遮断し、目の前の困難な状況から視覚的に隔絶することを意味する。その一方で、耳では体操の曲や子ども達の声を聞き、楽しい雰囲気も感じとっていたことが、徐々に体操に参加するようになっていったT男の変化に表れている。

2、『もの』を手放し、他に関心が向き始める時期

* 中部学院大学

** 黒野保育園

事例2 (5月下旬)

お気に入りの毛布は気持ちが崩れた時には必ず欲しがった。また家庭から自分のおもちゃを持ってきては片手に握りしめて持ち歩いている。その一方で少しずつ回りの子どもや『もの』に関心を向けるようになり、他の子どもがままごと遊びをしていると、その中に自分から入って行って、お皿の上におもちゃのご飯をおいて食べるまねをしたり、コップで飲むまねをしたりして、みんなの共用の『もの』を使って遊ぶようになる。その時には毛布や家のおもちゃは手にしていなくても大丈夫で、床に放り出されている。

この時期T男は、遊びたいものが見つからない時や気持ちが崩れた時には、家庭で慣れ親しんだおもちゃを持ち歩くことで、意識的に安定を図ろうとしていることが伺えた。また、気持ちが安定した時には毛布を手放すことができるようになり、結果、新たな『もの』を手に取り、その『もの』と新たな関係を作ることになっていった。このように手放せるようになったのも、そこに自分の安定を保障するお気に入りのもの、すなわち毛布があったからである。またこの事例は単に手放すということではなく、手放しつつも自分が不安定になった時には、いつでもそのお気に入りの毛布を手にする事で、気持ちの安定に立ち戻ることができるという見通しが彼の中に定着した表れと見る事ができる。『もの』は本来外的な力が働かない限りは動かない。そうした『もの』が本来持っている特性も、まだクラスが完全に居場所として安定しないT男にとっては非常に大切な意味があったものと思われる。

さらに『もの』のかかわりが多様になるということはその子自身の興味が広がることであり、それは彼の内なる世界が徐々に広がりを見せるようになったものと考えられる。

3、『もの』が本来持っている特性により現在を持ちこたえようとしている時期

事例3 (7月頃)

この時期、言葉で回り子どもとつながることは難しく、遊びの内容そのものも他の子と違っていたこともあり、ひとりでミニカーや人形等のおもちゃで遊ぶことが多かった。時折、言葉を発するが、しっかりと聞き取りづらい。しかし、とても楽しそうに遊んでいる。よく見ていると、その「言葉」は何かの台詞のようでもあり、その身振り手振りから、何かと戦っているように見える。T男なりに何かのつもりになって、イメージで遊んでいる。

保育という集団生活の場では、遊びにおいて、他児とさまざまなかかわりが生まれ、自分が意図しなくて

も、遊びに介入されることもある。それにより、対人関係が育ったり、違う刺激を受け入れながら遊びの世界が広がっていくものである。

しかし、この時期、T男が他者とかかわりを持たず、ひとりで『もの』とのかかわりを持ちながら自分のつもりの世界を楽しむ姿は、『もの』の存在が、彼にとって確固とした居場所になり始めた結果だと思われる。この時期に、他児がT男の世界に踏み込むようなことになっていたら、彼はそのことに持ちこたえられず、安定の場を失っていたかもしれない。つまり、T男がひとり遊びに没頭できたのは、人と違い『もの』は何も語らないという特性に依拠していたものと思われる。語る事のない『もの』と一緒に居ることはT男にとって心地よく、今の安定を脅かさないとても大切な時間を過ごしたものである。『もの』は何も語らないからこそ、自分のペースや、自分のイメージに添って遊びを展開していくことができる。そして、自分のペースで遊びのイメージや遊びの内容をふくらませていくことができる。『何も語らない』はずの『もの』だが、子どもの主体的なかかわりがそこに存在することで、子どもにとって意味のある存在となりうるのである。このように、T男は少しずつクラスの中で安定しながら、『もの』の特性に自らの今の状況を委ね、自分自身の育ちを促しているともいえる。

4、『もの』を介してつながりが生まれる時期

事例4 (8月)

T男は5月頃から時々粘土遊びをしている。当初は粘土をちぎったり、粘土板の上で塊りを転がしたりしていたが、この頃になるとちぎった粘土を順番に並べる遊びを始めた。ちょうどこの時期、クラスの男児の間でおもちゃの自動車を何台もつなげる遊びが盛んだった。

この事例から3つのつながりを読み取ることができる。第1に粘土をつなげて並べるという物理的なつながりである。第2に友達とのつながりである。それは、最初は友達とその自動車を繋げて遊ぶ姿をなんとなく手が出せず見ているT男だったが、その楽しそうな雰囲気に関わり込まれ、友達の行為をまねて、自分の内にその行動を取り入れようとしたところに表現されている。結果、その遊び方を覚え、友達と知らず知らずのうちに、場を共有して遊ぶきっかけとなった。さらに言えば、ここには『もの』を介することによる「友達とのつながり」が表現されている。第3に行動のつながりである。クラスの男児がつかないで遊んでいる車と、目の前のちぎられた粘土の二つ異なる現象が、T男のイメージの中でつながり、新しい遊びを生み出した。素材の違いをイメージの世界でつなげて、質的には同じ意味合いの遊びとして表現できる育ちをしているのである。

5、安定のために『もの』を意識的に利用しようとする時期

事例5（9月頃）

運動会の練習で、近所の運動場に行ってマスゲームの練習をしている時のことである。初めT男は、手に持ちきれないほどの木の枝や小石を集めてきて、片手に握りしめていた。踊りの邪魔になるのでそれらを手放すように促したが、T男は泣きそうになりながら、首を激しく横に振り、「いやだ！」という感情をはっきりと主張した。保育者が『もの』を持って踊ることを容認すると、安心した様子で、にこやかな表情になり、みんなと一緒に踊りに参加した。

T男は木の枝や小石を手放すように促され、それに対してははっきりと「いやだ」という感情をあらわにしている。これまでに比べ、この木の枝や小石に、はっきりとしたこだわりを持っていることが分かる。そのこだわりを保育者が阻止しようとしたことに、T男は腹を立てたのである。また、一見、大人からはまるで役に立たない小石や木の枝も、T男にとっては、大切な安定や支えの源になっていたことがわかる。いつもと違う場所に行くことは、T男にとって不安をいなくともあるだろう。そんな中で、T男は意図的に身近にあった『もの』を手に取り、握りしめることで安定を図ったものと思われる。それを無意識ではなく意識の上でしているという点からも、『もの』を自分の意志によって扱おうとする育ちを

感じることができる。

感覚的に身近な『もの』に依存し、その場をしのぐ4月の事例と、場の緊張を乗り越えみんなと一緒に踊るという自分の目的のために、積極的に『もの』を活用し、気持ちを立て直し、切り替えていくこの時期の事例とでは、『もの』の持つ意味合いが大きく異なっていることがわかる。

全体の考察

本研究を通して、子どもが『もの』とのかかわりにおいてあらわしてくる姿の中に、子どもの内なる世界で起きていることが投影されること、また、『もの』とのかかわりが、子どもの育ちに大きく関与していることが分かった。

おわりに

保育者が『もの』と子どもとのかかわりの姿を丁寧に見つめることで、その内的世界がより鮮明に見えたり、そこに子どもの育ちが反映されていることが分かった。それに伴い、適切な援助のあり方も見えてきた。

引用文献

- (1) ワロン著 浜田寿美男訳編「身体・自我・社会」
ミネルヴァ書房
- (2) 鯨岡峻・鯨岡和子著「保育を支える発達心理学」
ミネルヴァ書房